

## 夏目漱石の「明暗」におけるお延の人物像

アラン・キングホーン

世界中に知られている日本人の作家のなかで、もっとも有名なのは夏目漱石である。「吾輩は猫である」、「坊っちゃん」、「心」という作品は、日本人によく親しまれている。最初の小説「猫」のときから、漱石は優れた才能と技術を見せる。しかし、そのころのユーモアと風刺はだんだんと変わっていく。漱石の晩年に、彼の文学は暗さを帯びてくる。「それから」、「心」などの作品は人間のこころのふかいところまで掘り下げて書いている。その人間のこころの暗さをもっとも表わしている作品は「明暗」である。漱石の最後の作品であり、彼のいちばん長い作品である。それに、未完成であるために、分析するには、たいへん面白い作品である。

作家として、漱石はいろいろ文学的な工夫を使っていた。いまだに注目を集める事のひとつは、女性のあつかいかたである。漱石の作品に出てくる女性のタイプはさまざまある。むかしの女といわれる「心」のお母さんなどに対して、漱石は近代的といわれる女性のタイプも書いている。そのタイプをもっとも代表する人物として、この「明暗」に登場する津田延子が挙げられる。この女性は目的を持って、それを一生懸命に達成しようとする。

「明暗」のテーマは主人公の津田良夫のエゴイズムの問題である。二週間にも渡らないこの作品の大部分は、津田が手術を受けるために入院している間の事である。入院している病院で、体の手術を受けると共に、こころの手術もうける。二つの手術が重なるのは偶然ではない。これも漱石の文学的な才能を示すものである。

お延は「明暗」の第3章から登場する。主人公の妻として、小説の中のたいへん目立つ立場にいる。もちろん津田の問題はストーリーの中心となる。そして、妻はいつも目の前にいる人物であるから、お延は津田の問題の原因と思われることがあるが、そうではない。彼にたいへん影響を及ぼす可能性があるが、津田のエゴイズムはむかしから持っているものである。長く付き合っている小林や吉川夫人はそれを理解している。お延の行動にも目的がある。つまり、彼女は完全に津田に愛されるように努力している。

これはお延のエゴイズムを表わすものである。第78章に書いてあるように「誰でも構わない、自分のこうと思ひ込んだ人を飽くまで愛する事によって、その人に飽くまで自分を愛させなければやまない」という言葉で、お延はその目的を明確にする。「愛」という言葉が使われているが、たいていこの言葉は私心のない、他人に奉仕することを表わす。しかし、お延の「愛」は違う。彼女にもエゴイズムの問題があり、彼女にとって「愛」と

いうものはわがままなものである。お延の結婚の理想には、愛があるが、その理想と彼女の生きている現実とは全く違う。一般的にみれば、幸せに見えるが、お延がもともと愛がないために、それを得るまでほっとできない。

津田が手術を受ける当日のことがお延のわがままな態度の典型的な例といえよう。愛する夫が手術を受けるのに、彼女は自分のことばかりを考えている。朝から芝居へ行くつもりで、派手な服を着て、夫の面倒をみていると言いながら、どうやって津田から芝居へ行く許しを得ようか考えてきた。本文の43章には、津田の考えがこのように表現されている：

気の能く廻る津田の頭に、今朝からのお延の所作が一度に閃いた。病院へついて来るには派手過ぎる彼女の衣裳といい、出る前に日曜だと断った彼女の注意といい、此処へ来てから、そわそわして岡本へ電話をかけた彼女の態度といい、悉く芝居の二字に向かって注ぎ込まれているようにも取れた。そういう眼で見ると、手術の時間を精密に計った彼女の動機さえ疑惑の種にならないでは済まなかった。

結局、津田の許可を得、芝居へ行くのもお延の生活の象徴である。やりたいことができる自由を持ち、他人の注目を集めるような姿をしめすということ。彼女の言葉を借りれば、「誰からでも愛されたい、又誰からでも愛されるように仕向けて行きたい」ということになる。

夫に愛されるという目的を達成するために、お延は全力を尽くし、努力をしている。劇場の食堂で、いとこの継子がお見合いをする場面では、この特徴が表れる。お延は吉川夫人の話を一生懸命に聞き、吉川夫人の行動にたいへんな注意を払う。結局、吉川夫人のことに集中しすぎて、吉川夫人にアピールする機会を逃した。

お延の中には、まだ津田の心に影響を及ぼしている人物がいる。お延にとって、これはとても気になることで、津田の愛を得るための道のりを妨げているものである。小林が外套をもらうために津田の家に行く場面で、津田の過去をよく知っている小林の話に一生懸命に耳を傾ける。そこでお延は、自分の知らない津田の過去をそれとなく小林から聞き出そうとするが、うまくいかず、小林がかえってから、泣いてしまう。この悔しさが動機になって、お延は津田の昔のノートや手紙を盗み見してしまう。手紙を読んだから結婚してしばらくのことを思い出す。

突然疑惑の焰が彼女の胸に燃え上がった。一束の古手紙へ油をそそいで、それを綺麗に庭先で焼き尽くしている津田の姿が、ありあり

と彼女の眼に映った。その時めらめらと火に化して舞い上る紙片を津田は恐ろしそうに、竹の棒で抑え付けていた。

この時、お延は、自分より前に、他の女と津田が付き合っていたという事実を、初めて認識するのである。そして、その女の思い出がまだ津田の心の中には残っており、お延への愛を妨げていることに怒りを抱く。その女とはもちろん清子のことである。

清子以外にも、主な女性が二人登場する。津田の上司の妻である吉川夫人と彼の妹の関秀子。この吉川夫人とお秀はお延と反対の立場にいる。そして、お延には、この二人が清子とつながりを持っているという認識がある。だから、この二人は、お延には敵に思える。津田の入院している部屋でお延とお秀が対決するシーンが「明暗」のクライマックスといえよう。漱石はこの場面で起こる喧嘩をとおして「明暗」の根本的なテーマ、つまり津田のエゴイズムを上手く持ち出すのである。そして、お延とお秀の反応をとおして、漱石は人物の使い方もうまくみせている。

お延の目的を達成するには、津田の協力が必要である。津田が実際に「愛している」と言うまで、お延は決して休まないだろう。しかし、津田のエゴイズムは彼に深く根ざして、そう簡単に倒れるものではない。149章での会話：

お延は急に大きな声を揚げた。

「あたしは憑り掛かりたいんです。安心したいんです。どの位憑り掛かりたがっているか、貴方には想像が付かない位、憑り掛かりたいんです」

「想像が付かない？」

「ええ、まるで想像が付かないんです。もし付けば、貴方も変わって来なくっちゃならないんです。付かないから、そんなに澄ましていらっしゃられるんです」

「澄ましてやしないよ」

「気の毒だとも可哀相だとも思って下さらないんです」

「気の毒だとも、可哀相だとも・・・・・・」

これだけ繰り返した津田は一旦つかえた。その後で継ぎ足した文句は寧ろ躊躇として揺らめいていた。

「思って下さらないたって。――いくら思おうと思っても。――思うだけの因縁があれば、いくらでも思うさ。然しなけりゃ仕方がないじゃないか」

お延の声は緊張のために顫えた。

「あなた。あなた」

津田は黙っていた。

「どうぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思って安心させて下さい。貴方以外にあたしは憑り掛かり所のない女なんですから。あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまわなければならない心細い女なんですから。だからどうぞ安心しろと云って下さい。たった一口で可いから安心しろと云って下さい」

津田はこたえた。

「大丈夫だよ。安心をしろ」

「本当？」

お延は急に破裂するような勢で飛びかかった。

「じゃ話して頂戴。どうぞ話して頂戴。隠さずにみんな此处で話して頂戴。そうして一思いに安心させて頂戴」

しかし、津田はその一言が言えない。つまり、お延を愛している、お延を愛していて、他の女のことは考えていないということはどうしても言えない。ここで、津田のエゴイズムがどれほど強いかが明らかになる。

ある程度、お延の態度は津田にとってよい模範となるだろう。上に引用している節では、津田とお延の態度の違いが出てくる。「津田は黙っていた」という津田の態度にあるように、津田のは密閉的なものであるが、お延のはその反対である。お延は自分から問い掛けたり、「安心させて頂戴」などという言葉は何度も使ったりする。お延は全力でこの目的に向かって、自らチャンスをつかんで、この目的を一瞬に達成させようとする。このような強さは津田にはない。この一瞬の間に言おうとはするが、やはり清子のこと、特に彼女に逢いにいく温泉旅行の事がばれたら、まずいと思い、結局黙ってしまうのである。もしこのときに、津田も勇気をだして考えていることを言ったとしたら、彼の心の手術も成功に終わるはずであったが、彼にはそれほどの勇気がないために、そのまま黙って、清子に逢いにいってしまう。

お延の最終的な目的は津田に愛してもらうことである。津田はもう誰をも愛せない状態に落ち込んでしまったが、お延には人を愛するの気持ちがまだ残っている。ただし、彼女にもエゴイズムの問題があるから、それを克服する努力しなければ、完全に愛することはできないだろう。それは、彼女の愛という気持ちが、まだ自分を中心としたものであるからである。本当の愛というものは、自分のことを捨てて、何の利益も得ようとは思わず、他人に奉仕することである。お延は、自分の結婚に関する理想的なイメージを成し遂げるために津田を愛していて、それは結局自分自身のために人を愛する事になるのである。

「明暗」が未完成のために、これらの人物の将来がどうなるのかは、我々には知ること

ができない。しかし、それぞれの人物に、それぞれの想像はつく。津田がお延の模範に従って、自分を変えようとすれば、彼には幸せになるチャンスがある。したがって、お延が自分を捨てて、ほんとうの愛を実践すれば、彼女も幸せを見付けるだろう。彼らの行く末を知っているのは漱石だけである。

#### 参考文献

相原和邦 「漱石文学」、塙書房、平成元年

相原和邦 「漱石文学にみるしぐさ」、中國新聞、昭和63年5月5日

V. H. Viglielmo 「Light and Darkness--Afterword」、Charles E. Tuttle Co., 1971

夏目漱石 「明暗」、新潮社版、平成3年